

Title	ハインリッヒ・ボルンカム著 谷口 茂訳 『ドイツ精神史とルター』
Sub Title	Heinrich Bornkamm, Luther in spiegel der deutschen Geistesgeschichte
Author	多田, 真鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1979
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.52, No.11 (1979. 11) ,p.95- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	照会と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19791115-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

ハインリッヒ・ボルンカム 著

谷口 茂 訳

『ドイツ精神史とルター』

一

本書は、(Heinrich Bornkamm, Luther in Spiegel der deutschen Geistesgeschichte) の邦訳であり、ドイツ宗教改革の精神を顕現したマルティン・ルターの思想を座標軸として、爾後のドイツ精神史の各時代とのかかわりあいを取扱ったドイツ精神史研究である。従来、ドイツ精神史におけるルター像には、相剋する種々の見解がみられるところである。ルター研究の啓蒙書を著した成瀬治氏によれば、「ルネッサンスの流れをくむヒューマニストたちがエラスムスとルターの別離をかなしみ、この『粗暴』な行動人の狂信に肩をすぼめて立ち去るとき、十八世紀風の啓蒙主義者は『聖書の人』ルターの中にひとりの教育家を見ようとした。そして『ブルジョア的』歴史家たちがルターを封建的権威にたいする『自由の闘

士』とたたえるいっぽうでは、『マルクス主義的』歴史家たちが彼に、農民を見棄てた『嘘つき博士』、権威主義的な『王侯のしもべ』の汚名をきせているのである。もうひとつの問題は、ナチズムと第二次世界大戦を契機として、フランスやイギリスの歴史家たちの好んで提起するところとなつた。極端な場合には、ナチの思想的な源をたずねて、ニーチェからドイツ浪漫主義ないし観念論をへてルターへと遡る、単純明快な『系譜学』さえつくりあげられてしまつたのである。この場合には、とりわけルターに代表される『ドイツの内面性』と『権力の神聖化』が、市民的自由との関係で——またカルヴィニズムとの対比において——大きくとりあげられることになるだろう。こうした政治的なルター解釈は、とりわけ『国民的』な問題であると同時に、また『階級的』な問題でもある。(成瀬治著ルター)という具合に、ルター像の解釈をめぐるのは様々な評価のあるところである。さて、ボルンカムの労作である本書は、第一部叙述と、第二部原典の二部に大別されている。さらに第一部は、第一章「宗教改革から啓蒙主義へ」の項目から始められ、第十九章「二十世紀の政治運動のなかのルター像」、および第二十章「新たなカトリック的ルター像とルターに関する宗派間の対話」の二十章によつて詳説されている。

第二部も、第一群「古典主義—観念論—ロマン主義」、第二群「十九世紀の学問的ルター像」、第三群「二十世紀のルター像」の三群に分けられ、各群とも細目の章が設けられ、各時代の思想家たちの原典にあらわれたルター像が、夥しい資料の渉猟によつて収録されて

いる。ルターと母国をとにもするドイツ神学の研究者であり、斯学の碩学ならでは到底なしえない偉業であると言えよう。

著者のボルンカムは、その初版への序文において、「ルター像の歴史は、すでにしばしば、非常な魅力と精神史的な意義をもつ課題として見なされてきたが、これまではただ部分的な叙述が行われただけであつた。……必要なのは、ルター像の変遷を精神史の広がりの中へ追求して行き、そのことによつて諸宗派の境界を越えるという二重の熟慮なのだ。

一面において、宗教改革を動かしたおびただしい思想、力、問題は、百倍にも拡大された像においてはじめて開示される。そして他面、比類のないかたちでドイツ民族の運命的な人物となつたルターに對して、彼とかかわり合つた人はそのほとんどが、歴史的判定を下すだけでは満足することができなかつた。だれもが、何らかのかたちで旗幟を鮮明にすべく強いられていることを知つた。」(五頁)と述べている。本書は、ほぼ七〇頁に近い浩瀚な著作であるから限られた紙数で逐一紹介することは不可能である。そこでドイツ政治思想史を研究するものの視点において、この書のもつ性格と意義を摸索してみよう。

二

当初に、ルターの宗教改革の思想をめぐる正統派や敬虔派の神学論争に触れながら著者は、啓蒙主義時代におけるルター像の確立に

論を移行させて行く。「これまでの解釈にとつてもルター本人にも思いもよらない、ひとつの本当に新しい特徴を彼の像のなかにもちこんだのは、啓蒙主義が初めてであつた。……いまやルターの神学ではなく、彼の人格に関心が向けられ、人々はほしだいに、一部は敬虔派の道徳的な異論を続行するようなかたちで、明暗のはつきりとしたルター像を描きあげていつた。……彼の修道院での内面的苦闘、神の試練、祈りの格闘などは問題にされなかつた。……彼によつて戦いとられた良心の自由から、学問の自由という結論がひきだされ、そして学問によつてルターの教義をこえてルターの精神のなかへはいつてゆくことができる、ということになつた。」(二七一—八頁)と述べている。

すなわち、啓蒙主義において「ルターの快活さや開放性、秘密結社を忌み嫌う教会中心の考え、そしてとりわけ官職や市民的な天職へ向けての教育」という側面が強調され、そのことによつて「ルターは地上の神の王国の歴史に一時期を画しただけでなく、ひとつの新しい世界を——宗教的、精神のおよび政治的に新しい世界を——招来したのだという一般的な意識が目覚め」ることとなり、はじめてドイツ精神史の対象となりえたが、それはまたその後のルター像をめぐる論争の端緒をつくり出したことでもあるとボルンカムは説くのである。(一八一—二〇頁)この啓蒙的合理の思想によつて創造されたルター像は、ヘルダーによつてまた新たな相貌をもつこととなる。すなわち、ボルンカムによれば、「民族精神の発見者ヘルダーは、このことによつて、自由の英雄および世界史的偉大さをもつ人格と

してのルター崇拜に、のちに十九世紀の後半において、最も大きな主題のひとつとなるはずの、第三の特徴をつけ加えた。それは、ルターの精神のなかに、ドイツ民族の国民的宗教が最も純粹なかたちで言明されており、ルターはそれによつてドイツ民族が成年に達するのを助け、さらにドイツ民族に、諸民族と比べた場合に現われる、その眞の個性を与えた、という主題（二九頁）が形成されたのである、ヘルダーは「ルターの讚美歌に民謡の響きを聞いた。」（二七頁）と説いている。そしてそれに続くドイツ觀念論哲学の流れ（第三章）と、ノヴァーリス、シュレーゲル兄弟等のロマン主義（第四章）におけるルター像は、いわば対極をなすルター像を創り出したという。すなわち、「古典的——觀念論的なルターおよび宗教改革理解は、——根本的にはやはり、その宗教的な根本の意味ではなく、精神の歴史におけるその地位、最も広義におけるその文化的業績を問うもの」（四二頁）であり、ロマン主義のそれは「宗教改革は、キリスト教的ヨーロッパ的伝統というつながりをずたずたに引き裂いてしまった。それは時代に委ねられた全教会の更新という課題を果さなかつた。それは結果として啓蒙主義の不毛と宗教否定」（四八頁）とを招き出したのであるという評価をくだしたものとされる。しかし、ポルンカムによれば「觀念論的賞賛もロマン主義的悲嘆も、どつちもどつちである。双方ともにその対象からの歴史的距離、すなわち、対象をその歴史的全体性と特殊性とにおいて捉えるための遠近法的な見かたが欠けている。両者とも対象を——もしくはむしろ対象の前景をなしている一定の特徴を——自分の正当さの確証としてであ

れ、対照としてあれ、自己弁護のためにあまりにも使いすぎたのだ。」（五二頁）と批判している。続くランケ史学におけるルター像の形成（第五章）を、ポルンカムは次のように評する。「ランケの描いたルターは、血と肉をもつた初めての歴史的人間であり、もはや善きもしくは邪悪な原理の化身ではなかつた。ランケがこのような結果に達することができたのは、けつしてたんなる背景の記述や人格の描写によつてではなく、——そしてこのことこそ私にはランケの本来的歴史的業績であるように思えるのだが——人間マルティン・ルターのとに従つて、その実存の根底へ、そのあくまでも個人的な闘争へ、試練へ、そして発見へと追体験して行くことによつてであつた。」（六〇頁）と述べ、ランケによつて、ロマン主義的および觀念論的問題設定の呪縛が断ちぎられ、宗教改革史の試みはもはやそこへ戻ることは不可能となつたと言明している。

三

第六章では、十九世紀中葉のドイツにおける政治運動とルター像をとりあつかつているが、この時代は一般の関心が政治・社会改革の方へ向つていた時期でもあり、「人々の意識は、古典主義、觀念論さらにはいまを盛りの歴史叙述を通して、あらたに、しかし啓蒙期よりも深く、ルターの精神的力と改革者の理念によつて強く浸透されていたから、いかなる政治運動も彼を避けて通りぬけることはできなかつた。」（六六頁）と述べ、F・J・シュタール、H・レオの政治的保守主義、一八四八年のフランクフルト憲法国民会議へ参加し

たK・ハーゲンとG・ゲルヴィヌスの政治的自由主義、およびマルクス、エンゲルスの共産主義におけるルター像に言及している。ポルンカムは、マルクスの「ドイツの革命的過去は理論的なのである。つまりそれは宗教改革である。」との発言を引例し、「この発言の根底には、すべてのヘーゲル派に共通する一つの観方が認められる。というのは、未来が精神の自己自身への解放と表象されるにせよ、革命として表象されるにせよ、宗教改革がドイツ史において理論の問題として中心的位置を占めるといふ論題に関しては、いかなる変更を加える必要もないからである。マルクスはこの問題連関に対して、『ヘーゲル法哲学批判』(一八四四年)の序文において、たんなる歴史の意味以上のものを与えた。彼はここに、すでに現われ始めていた未来の革命的出来事の一つのひな型を認めた。」(九三頁)と説き、ルターと宗教改革に対するマルクスの姿勢を単的に指摘している。さて、十九世紀中葉の政治運動におけるルター像は、保守派も自由派もさらにはまた共産主義運動においても、自らの政治イデオロギーの正当化のためにルターの英雄伝説化を行つたのであつたが、世紀末に近づくにつれて、ブルクハルト、ニーチエ、P・ラガルド、キルケゴールなどによるルター批判の宣言がなされ、——その間、E・トレルチに代表されるより慎重なルター解釈もあつたが——、ドイツ精神史は第一次世界大戦を迎えることとなる。この大戦を契機として、神学、歴史、哲学、文学の各学界において新しい学問的論議が再燃し、ルターと宗教改革という歴史的業績を再度統一的に把握しようとする趨勢があらわれてくる。この時期を、ルター像変遷の

第三期と規定する菊盛英夫氏は、その著「ルターとドイツ精神史——そのヤーヌスの顔をめぐつて——」において、次のように指摘されている。参考までに引例してみれば、「全体を通じて指摘できるのは、真に重要なルター像の形成には、結局のところ、ドイツ精神のある内的革新がつねに先行しているという事実であろう。ランケの普遍的ルター観ですら、ドイツ理想主義哲学と啓蒙主義を深化したシュライヤーマハーなしには考えられないし、またかのキルケゴールの痛ましいまでに呻きを伴つたルター攻撃にしても、当時の教会的ルター伝説中に安住できない自己のキリスト教信仰の確証の努力にはかならなかつたと言えよう。つまり、ルター讚美者もルター弾劾者も、等しく自己自身と自らの時代にひきつけてルターを理解しようとしたといふことである。」と述べられているが、まさに、傾聴に値する指摘であろう。さて、再度ポルンカムの叙述に立ち戻つてみよう。彼は、E・トレルチのルター解釈(第十二章)を次の二点において捉えている。すなわち、トレルチにおいては、合理主義的なルター伝説および民族主義的なそれを破壊しようという意志があつたことがその第一点であり、その際、ルターの宗教的理念が当時の階級闘争から生じたとする唯物論的な歴史理解にも激しく反対の意を示したと言ふ。(一三七—一三八頁)

そしてその第二点は、「トレルチの記述の第二の根本動機は、ルターの倫理の、特にその政治的倫理の弱点へ向けられた批判とは対立したものである。それは、……秘蹟から恩寵へ、教権制度的教会から信仰共同体へ、思弁的教義から心の敬虔へと完成したルターの宗教

的天才への賛嘆であつた。」のであり、かくしてトルルチは、一つの新しいタイプのルター像を作りあげたのであるが、しかし「それは賞賛と同時に非難に値する一つの双面神の頭」(二四〇頁)でもあつたと言う。ボルンカムによれば、「第二次世界大戦中および戦後、ルターおよびルター派教会が近代ドイツ史の誤つた展開に対して責任があると考えられたその論拠の大部分は、まさにトルルチに由来するものである。」(二四〇頁)と断定をくだしている。

四

当初にも断つておいたように、この紹介においてはルター像の変遷を、とくにドイツ政治思想史を専攻するものの視点において認識したいと試みるものであるから、次に二十世紀の政治思潮との関連におけるルター像の展開に移つて行きたいと思う。最近において「ルターからヒトラーへ——ナチ政治哲学の歴史——」(William Montgomery McGovern: From Luther to Hitler, The History of Fascist-Nazi Political Philosophy. 1973) というタイトルのつけられた書物も公刊され、ナチズムの思想的源流としてのルターという研究もアメリカの学界などでしばしばあらわれてきている。この問題領域に関してのボルンカムの見解をただしておいてみたい。

まずボルンカムは、ナチズムの形成期においても、第一次世界大戦の開始期と同様に、国民的なルター熱が再燃してきたことを認めるのであるが、「このパトスは、ルターの本来の思想と彼の歴史的な業績とのあいだの内的な結びつきを無視するようになればなるほ

ど、いよいよ空虚なものとなり、それ自身あいまいなものとなつた。それゆえそこからは、精神史上にすぐれた地位を占める文献は生まれなかつた。」(二二三頁)と断定している。そして彼は、ハンズ・プロイスの「ドイツ人マルティン・ルター」(一九三四年)、メラー・ファン・デン・ブルックの「第三帝国論」(一九三三年)フリートリヒ・ヒールシャアの「帝国論」(一九三二年)、アルノー・ドイテルモザーの「ルター・国家と信仰」(一九三七年)等の著述を引例しながら、この時期における片面的なルター像を解明はしている。

しかし、結論としてボルンカムが述べている次の言葉にわれわれは注目しておくべきであろう。「メラー・ファン・デン・ブルックとヒールシャアの精霊の『第三の国』という隠された『宗教的底流を伴なつた『帝国神話』は、それまでの古いさまざまな見解の総括的タンク以上のものではなかつた。しかしまさにそれゆえに、それは影響を及ぼすことなく終つた。国家社会主義の政策にとつてはあまりにも複雑すぎて歴史神学的でありすぎ、また神学にとつてはあまりにも非歴史的でこじつけにすぎたので、このルター論は後継者を見つけることができなかつた。」(二二二頁)と言っているが、ルターとナチズムとの関りあいについての著者の見解の一端が語られていると考えられる。すなわち、ボルンカムによれば、ナチズムが、その自らの精神的武器とするにはルター思想はあまりにも高遠であり、その思想を媒介として、大衆を組織化するには難解すぎたので、単にドイツ英雄伝説としてのみの利用しかなしえなかつたと解しているのである。次いで著者は、今次大戦後のマルクス主義にお

けるルター研究の状況を次のように把握している。「第二次大戦の終結以来初めてソ連で、次いで東ドイツで活発に行なわれるようになった、マルクス主義的な宗教改革研究は、マルクスによつて、いやそれ以上にエンゲルスによつて引かれた基準線に厳密に従つて動いている。二人の著作や十九世紀のマルクス主義文献でのそれらの利用の仕方と比較してみても、ここには何も新たな原則は見いだされない。その抽象性もまた、完全にこの偉大な先人たちの仕事から由来する。」(二三頁)と述べ、ルターと宗教改革に関する、戦後のマルクス主義に基づく研究に新鮮味が欠如していることを指摘している。しかし、エンゲルスが、宗教改革を「初期ブルジョア革命」と規定し、その当否についての論争が、ソ連をはじめとしてマルクス主義陣営に再燃していることに関しては、ボルンカムは次のような評価を与えている。「『初期ブルジョア革命』としての宗教改革というスローガンは、現実の歴史の多彩さを灰色と化する一般化の類である。それゆえに、個別研究がしだいに熱心に経済的社会的状態へ向けられ、そしてあまりにも抽象的な構成についてすでに一連の注目すべき訂正が始まつたことは歓迎すべきことである。」(二三頁)と解説し、戦後のマルクス主義陣営におけるルター研究に前向きな評を加えている。この紹介を閉じるに当つて、訳者谷口茂氏の労を多としたい。松田智雄東京大学名誉教授もその書評において、「訳者谷口茂氏は、この浩瀚な著作を透徹した理解のうえに翻訳された。そのような理解抜きに、本書のような稀に見る充実した内容を整理してゆくことは不可能であつただらう。」と評せられている

が、筆者もまた同感である。谷口氏は、この書に対して訳者としての評価を次のように述べている。すなわち、「現象的にはルターと各時代の思想家との関係として、そして原理的には、ヨーロッパ精神史一般を成り立たせる三大要素、ユダヤーキリスト教的の神中心思想、ギリシヤ的人間主義、そしてゲルマン的精神風土の拮抗として、本書はヨーロッパ型精神史研究の一つのモデルを提供しよう」と確信している。」と言われているが、この訳者の評のごとく、この書は、類を見ぬドイツ精神史研究の金字塔ともいふべきであろう。かつてのヴィンデルバンド、ディルタイ、トレルチ、マイネッケ等のドイツ精神史研究に匹敵しうる労作であると筆者も考えている。さらにはまた、谷口氏は、その「あとがき」の最後に「近年ヨーロッパと日本との相違を強調しすぎ、その勢いが昂じて相違を絶対視し、日本精神史研究のためにヨーロッパ精神史研究は不要と考えるような軽薄な風潮も認められる。問題は先ず、日本精神史という問題意識そのものがヨーロッパの刺激への反応であつたことが忘れられているところにある。その当然の結末は、術語から思考図式や方法までヨーロッパのものを換骨奪胎していながら、そのことにまつたく気づいていないという鈍感さの横行である。」(六七四頁)と、わが国における思想史学界的風潮をてきびしく批判しておられる。この傾向に対しては、筆者などもつねづね心底ひそかに考えていたところのことであり、この一文を読み一服の清涼剤を味つた思いがしたのである。

いずれにせよこのボルンカムの労作は、わが国において、今後西

欧および日本の思想史学の学域を専攻する人々にとつて、看過し等閑に付することのできない著作であることは疑いえないところである。

多田真鋤